

エックス線や超音波を使って、さまざまな構造物の内部の腐食、劣化などを調べて事故を防ぐ「非破壊検査」。その専門技術を持つ会社の、北陸における嚆矢である。全国に約百五十社ある同業の中でも、最高の資格を取得したエキスパートの数で上位十三位にランクされ、地域の建設業界などから絶大な信頼を獲得している。人の病気をレントゲンやCT（コンピュータ断層撮影）で検査するように、建築物に潜む「見えない危険」をチェックする仕事は、企業の利益追求とは別に、「安全、安心」を支える社会的使命を担う。高見はそのことを誇りとし、新たな検査装置の開発に余念がない。

### 北陸初の「非破壊検査」会社を設立

「非破壊検査」の会社を興したのは偶然のきっかけからでした。二十八歳の時に機械設計の事務所を開いて、一人でクレーンや水門など製缶ものの設計をしていたのですが、溶接機材の会社をやっていた兄に頼まれ、関西電力がダムを建設している奥飛騨の下小島までポンベとアセチレンなどの機材を運ぶ手伝いをしました。そこで、建設現場の責任者から、水圧鉄管内に亀裂などが無いかレントゲン検査したいので、富山の鉄工所を紹介してくれと言われたのです。大阪から業者を呼ぶと費用が高つくので近くの業者を探しているようでした。富山の大手有力企業のA社、B社など、

## 生々流転 27



## 高見 貞徳

富山検査協会会長（富山市）

## 偶然の出合いで見抜いた 新事業の将来性

取引のある五社ほどに声をかけたのですが、全部断られてしまい、結局は大阪の業者が呼ばれたようです。よくよく調べ

てみると、当時、大きな鉄工所はレントゲン検査の担当者も置いていませんでしたが、日常的に発生する業務でもないのに、ほ

とんどは資格を持っている管理職が兼務していたのです。しかも、現場に出向いて検査し、フィルムの現像処理や判定などに時間と手間がかかるため、忙しくて他社の検査までしている余裕はないのが実態でした。中小の鉄工所は資格を持つスタッフを置いていないし、富山県内はもちろん、石川県にも専門業者がいないことも分かりました。

そうした経験をした翌年の昭和四十九年暮れ、岡山県倉敷市にあるC石油水島製油所の屋外タンクに亀裂が生じ、瀬戸内海に大量の重油が流出する事故が発生しました。この事故を契機に内部点検の重要性が叫ばれたこともあって、「非破壊検査」の重要性が広く認識されるというタイミングに恵まれました。この仕事は頻りに需要があるわけではありませんが、なくてはならない分野です。これは商売になるんじゃないかと考え、独学で勉強してエックス線検査装置のオペレーター資格を取り、会社をつくりました。三十五歳のときでした。

検査の仕事がないときは機械の図面を書いているとか食べていけるだろうと、どっち付かずの中途半端な考えをしていましたね。当初は、検査スタッフを持たない中小の鉄工所からの発注を念頭に置いていたのですが、意外にも、会社を設立した直後から大手も専門業者へ外注に出すようになりました。嬉しい誤算とでも言いましょうか。

「中途半端」に設立したと言う会社が、今では八億円（平成二十一年三ヶ月予想）の売り上げを生む企業に成長した。しかし、たまたま出合った「非破壊検査」という事業の将来性を見抜いた眼力は、どこから来るものなのか。戦中戦後の貧しい時代に七人兄妹の中で育ち、それほど学歴も身につけさせてもらえなかった高見の青春は、厳しい戦後を生き抜くための飯のタネを探し続けた日々であった。そのハングリイな精神が育てた動物的嗅覚でつかみ取ったのが「富山検査」である。

### 苦学の成果を経営に生かして

男五人、女二人の七人兄妹で、私は三男坊です。父は、母の兄が経営するある会社の手伝いをしていましたが、戦争中でもあり、生活は貧しかったですね。一つ家に両親と私たち兄妹、それに祖母と叔母の十一人が生活するわけですから、子供のころから一日も早く家を出たいと思っていました。中学を卒業するころです。たまたま役所の倉庫の前を通り抜けようとして目に入ったのが、横須賀にあった陸上自衛隊通信学校の生徒募集の張り紙で、とりあえずという気持ちで受験してみました。それがかなりの難関でしたが合格しました。まぐれだったのでしょうね。実は地元の高校にも合格したのですが、滑り止めぐらいの軽い感じで受

たかみ・さだのり 昭和十五年九月二十七日、富山市柳町生まれ。陸上自衛隊通信学校を経て、富山県立雄峰高校卒業。大阪市と富山市で鉄工所に勤務した後、四十四年四月、富山市内で伸和機械設計事務所を開設。五十一年四月、富山検査協を設立して社長となり、平成十六年六月から会長。富山鋼業相模役。富山県倫理法人会相談役。異業種交流グループ「文殊の会」会長、NPO法人「とよま鴻を愛する会」理事長も務める。六十八歳。

けた通信学校の発表が先にあつて、それも学費や生活費がかからないところか、当時で月五千四百円も手当てがもらえるのは何よりも大きな魅力でしたから、喜んで入学しました。人生はどこでどうなるか分からないものですね。もちろん、国民の負託に応えて国のために命を捧げる気持ちでいましたよ。

しかし、通信学校で勉強しているうちに大学へ行きたいという気持ちがあったんだと強くなってきました。自衛隊を除隊して、夜間定時制の雄峰高校四年生に編入しアルバイトをしながら大学を目指しました。しかし英語の学力が足りずこれでは付いていけないと、きっぱりあきらめました。家庭の事情を考えても私には後がありません。商売の道へ進むことに決めたのです。兄から鉄工所の仕事はどうかと勧められ、雄峰高校を卒業してから富山市新庄の県立高等技術学校に入って職業訓練を受けました。同時に独学で機械設計の勉強もしました。それから、大阪と富山でそれぞれ四年間、鉄工所で

働きました。これらの鉄工所で経験したいろいろな苦勞は、会社を経営する立場になって大變役に立ったと思えます。

昭和四十四年春、伸和機械設計事務所を開設しました。設計事務所といつても、富山市蓮町の自宅の一部屋に製図板とドラフター一台があるだけでしたが、仕事は忙しくらい順調でした。十日間、一日四時間しか眠らずに仕事をしたときには体を壊し、十日寝込んだこともありまし。大阪の鉄工所時代には軽いせんそくを患った病歴もあつて、体力にはあまり自信がない方だったので、別の仕事を考えていたときに「非破壊検査」という世界を知ったのです。

見えない部分で進行する大事故の危険性。その予兆を事前にキャッチして事故防止に役立てる業務は、生産設備やインフラの高度化、複雑化に伴つてますます重要性を増していった。検査にかかる最小のコストは、万一の事故災害から発生する莫大な負担を抑える「保険」としても広く浸透し、時代の要請に適うものであつた。高見は機械設計の技術を駆使し、新たな検査装置を次々と開発する。会社の業績は飛躍的に伸びていった。

システムも画期的なものだったので、ほぼ全国独占販売の状態です。こうしたシステム、機器の開発が功を奏して、六年前には五億円ほどだった売り上げが九億円に跳ね上がりましたね。やがてこれも一巡して売上増に結び付かなくなつたと思つたら、今度は本体業務であつた土木関連の検査が盛り返してきました。今期はピーク時の九億円には達しませんが、約八億円にはなるはずですよ。

大型構造物の内部の検査は、法定義務を除けば、悲しいかな、事故が起きて初めて需要が生じるケースが多い。すべての施設を毎年点検するのは不可能であり、コストの面でもありえないことだ。まして、利益を最優先する企業の論理は、つい「安全」は後回しにされがちであり、検査の専門業者は数少ないといえども、おのずと仕事のパイは限られてくる。

### トップレベルの技術を開発

構造物の内部を点検する新しい機械が開発されればされるほど、事故防止の強力な武器になるし、コストを抑えるための手抜き工事も少なくなるでしょう。しかし、誤解を恐れずに言うと、何から何まで工事の中心が分かつてしまう検査機器という



平成7年から始めた歩き遍路も6巡目に入る(66番の雲辺寺で)

### 目に見えぬからこそ安全点検が重要

富山検査は県内で初めてとなる「非破壊検査」の専門会社だったので、営業にそれほど力を入れなくても仕事が舞い込んで来ました。もっとも、受注先から初めて手形をもらい、四カ月後に現金が入ると期待していたら、その会社が倒産するという苦い経験もしましたね。当時で七十五万円の手形でしたから、わが社にしてみれば大金でした。その会社は後に再建され、別の仕事をもらつてなんとか理め合わせしてもらいましたけどね。

設立当時はエックス線を使った検査だけでしたが、その後は磁粉探傷、超音波探傷、浸透液を用いる浸透探傷などの方法が開発され、さまざまな形状、材質、部位をいろいろな方

のもあまり歓迎されない雰囲気もあります。事故さえ起きなければ、少しくらいの欠陥があつても問題にならない場合が多いのですから。そうした、業界の秩序みないなところで私たちは仕事をしたいかねばなりません。

とはいっても、安全のために必要な機器はますます正確性、精巧性が求められ、工法の発達に対応する新たな検査方法も必要になっていきます。ですから、私たちは常に高い技術を持ち、他社にまねのできないトップレベルの研究開発を続けたいと考えています。わが社の資格取得者は業界上位十三位にランクされ、全員が五年ごとの資格更新を通じて最新の技術レベルを維持する努力を怠りません。わが社は業界で唯一、金属とコンクリートのいずれの内部も調べる技術を持っています。が、この技術を生かして、最近では鉄筋コンクリートの内部の鉄筋と空洞を識別する画期的な装置を開発中です。

平成十六年、県内百五社が加盟して設立された富山県倫理法人会の会長に就任、現在も相談役として活躍する。同会は、「企業に倫理を」「職場に心を」をスローガンに活動しており、コンプライアンス(法令遵守)

法で調べることができるようになりました。検査のための装置もだんだん小さく、軽くなっています。

私たちが技術力を高める努力を怠りませんでした。それは「非破壊検査」の仕事の幅を広げることにつながります。その一つが、スキー場リフトの点検システムです。あるメーカーが京都大学との共同研究で、磁石を使ってワイヤーロープの内部断線を検出する機器を開発し、東京の展示会に出していたのですが、これを見つけて三百五十万円売ってもらうことができました。資本金四百万円の会社でしたから、思い切った投資でした。この機器は地底から掘った石炭を斜面に沿って引き揚げるためのワイヤーロープ向けに開発されていきました。私はこれを参考に、天井クレーンやスキー場リフトのロープを点検する機器を考案し売り込みました。しかし実際には検査コストなどの問題でほとんど使ってもらえず、その代わりにスキー場からの提案を受けて、リフトの軸受けの異常を点検する機器の開発に努めました。これはわが社独自の機器であり、軸受けを分解して点検しなくてもいいのですから、全国のスキー場で使われています。

また、ガンリンスタンドなどの地下タンクや埋設配管の異常を調べるの確立、効率第一主義に伴う職場の人間関係の荒廃が叫ばれる昨今、企業経営の在り方に一石を投じている。富山検査の経営理念も「百年の大計 人と公」と題して、半永久的な経営の継続、社員の自主性による質的成長、企業は社会の公器であり、日本の一隅を照らすことなどを掲げている。そして高見自らは、四国霊場八十八カ所巡りが六巡目に入っているという。

### 経営者の責任と社員の志

独立する前に勤めた鉄工所で得た教訓は、経営者は社員を大事にしなければならぬということ。つまり、経営者は社員が人生設計を実現するための環境をつくり、会社を永続させる責任があります。そして、社員が高い志を持って、楽しく働くことのできる会社をすることです。私が勤めた会社はそうでなかったから独立を決意したのですが、社員が定年まで生き生きと働ける会社になりたいと思っています。

十年前に「四国霊場巡り 歩き遍路の世界—小企業経営者は歩きながら何を考えたか」という本を出版しました。歩くことそのものを目標に平成七年から続けた遍路旅の体験談を経営哲学や人生観を交えて綴ったエッセイです。(文中敬称略)

## 生々流転